

空外会

山本室外上人 十三回忌追善記念誌



空外会報特別号

第33号 平成26年(2014)

—空外先生へとつながる学縁

東広島市 衛藤吉則

無自性

無自性。空外先生は、龍樹の中論をもとに、「衆縁に従るが故に必ず自性無し」という言葉を残しています。華嚴の「事事無礙の法界縁起（個別的にみえる事と事は、けつして無関係でなく、目に見えないところで結ばれている。つまり、相互に依存し、相互に限定し、相互に助け合いながら成り立っている）」や「一一の微塵の中に悉く見る佛刹の海（仏の智慧や慈悲のこころは現象界のあらゆるものに内在し見いだし得る）」に通じる言葉です。後に紹介する空外先生とゆかりのある出西窯の多々納氏は、この言葉の本質について、「ひとりだけでなし得るものではなく、すべて〈おかげさま〉なんです」とお話しくださいました。

この無自性の原理を体得すれば、自他は不二となり、ここに空外先生のいう「無二的人間形成」、つまり「相手も生かし、自らをも全うする〈各々性〉の境位」が成立するものと思われまます。

以下では、空外先生の十三回忌に当たり、直接、空外先生

にまみえることのなかった私と先生との時空を超えた「無自性としての学縁」についてお話しさせていただきたいと思えます。

西晋一郎先生の言葉との出会い

空外先生さらには広島倫理学を知るうえで私の原点となる言葉はつぎのものです。

「徹底というのは水が出るまで井戸を掘ることです」

この言葉を聞いたのは、たしか、広島大学の学部三年生のころで、新本先生の演習でした。どなたの言葉であるかの説明はなく、「よりよく生きる」とはどういうことかについて解説する際、例としてあげられた言葉でした。「土を掘る」の説明はこうつづきます。「その作業は、はじめ瓦礫ばかり出てきて、苦勞が多い割に少しもよい変化を実感できない。それどころか後戻りしているようにも感じられる。そのため、多くの者はこの生き方を最初の時点で無意味である諦めてしまう。しかし、けつして諦めてはいけない。この問いの徹底の先に真の生き方があるので、うまずたゆまず掘り進めな

さい。先に進めば、必ず、掘る土に変化が生じ、湿った土、さらには泥水が出てくる。そこに達すれば、自らの進んできた方向に確信をもつことができる。そうすれば自信をもつていつきに掘り進めなさい。すると、奥からこんこんと清らかな水が湧き出てくる」と。

この寸言が、空外先生を広島に招聘した西晋一郎先生のものであることを知ったのは、広島大学に教員として赴任後、西倫理学に取り組むようになって以降のことでした。この言葉に込められた西先生の意図はつぎのようなものでした。

ひとは、「相手にとつても自分にとつてもそれが自由であるか」という点に意識の照準を定め、井戸を掘るように突き進むことで、より高い意識と生を実現できる。ここに至り、一般的で可視的な水平軸上の明証性とは別の、内観に基づく特殊内部における垂直軸的な「理解」の〈確からしさ〉が自知される。

空外先生の「無自性」「無二の人間」に通じる言葉であるように思われます。その西倫理学のエッセンスを解説する前に、空外先生との最初のご縁についてもお話ししたいと思えます。

空外思想との機縁

空外先生との最初のご縁を振りかえるとき、わたしには後悔の念が起こります。それは、教育学研究者となって五年目

の平成十年のことでした。わたしはその前年に、西日本新聞社から依頼を受け、二年がかりで、江戸時代に活躍した博多聖福寺の禅僧仙厓義梵の本を執筆していました。わたしはこの原稿を書き上げたあと、禅思想に詳しい新本先生にそれを見ていただきました。その際、「仙厓のことなら、空外先生が書画も所有され、思想についてもご存じだと思うので、ぜひ、一度、先生がいらっしゃる十月に隆法寺を訪ねてみなさい」と、ご助言いただきました。しかし、原稿提出の期限が迫っていたこともあり、実際にお会いしてご指導を請うことはかないませんでした。その後、空外先生の事跡を学んで分かったことですが、この平成十年十月の別時念仏会が隆法寺での空外先生最後のご法話となったのです。直接お目にかかれるご縁を生かし切れなかったことをとても残念に思いました。

その後、わたしは教育学研究者として大学に在職していた平成十七年に、伝統的な倫理学研究に加え応用倫理学をも推進する広島大学倫理学研究室の教員採用面接に臨むことになりました。その面接に当たり、不思議なことに、わたしの脳裏に空外先生のご話が再び思い起こされました。しかも、指定された面接日はちょうど十月。空外記念館の開放月でした。わたしは、導かれるように、面接前日に、これまでかなわなかったその地への訪問を決めました。

そこには「平成の平等院」と称される堅固な記念館が晩秋

の里山を背に凜と建っていました。当日、来客はおらず、わたしは空外先生の蔵書や所蔵品を前にひとり沈思することができました。「わたしが広島に行くことの意義は何だろうか」「伝統ある倫理学研究室で、わたしに何ができるのだろうか」と静かに、自らと空外先生に問いかけました。そして、その答えの一つが、「いつの日か空外思想に光を当てたい」というものでした。

西倫理学との出会い

わたしは、平成十八年に古巣である広島大学倫理学研究室に教員として戻ることになりました。しかし、当初は、私が



空外記念館と所蔵品（左の書画が仙厓筆「仙人図」）

取り組んできた、ドイツの思想家ルドルフ・シュタイナーの認識論・教育思想、ナシヨナリズム・平和論、禅思想、近代日本思想、神智学等の研究が、この伝統ある研究室においてどのように貢献できるのかといった具体的なイメージは定まっていませんでした。

そうしたなか、わたしの所属する教育哲学会から、戦後教育学によって〈封印〉〈分断〉された戦前の教育学に原理的な再検討を加えたいので、衛藤さんは、わが国の国体論形成に大きな役割を果たした広島高等師範教授西晋一郎の思想をまとめてくれないかという依頼を受けました。一年間の猶予があり、その間に『忠孝論』をはじめとする西先生の主要著作を読み込み、「西晋一郎の思想―特殊即普遍のパラダイム」を発表・公刊し、学会にその意義を報告することができました。しかも、この西倫理学研究に取り組んでわかったことは、これまで積み重ねてきたシュタイナー思想・神智学・ナシヨナリズム研究の下地がなければ、その全体像の深みを正確には読み解くことができなかつたということです。とりわけ、西先生がシュタイナー同様、アンモニオス・サッカスからプロティノスを経て拡がる神智学思想（Theosophy）や陽明学者中江藤樹の思想を自らの思想の中核に置いていたことを知り、研究上の必然的な縁を感じました（シュタイナーは自らの人智学思想を確立する以前、ドイツ神智学協会の事務局長

を務め、驚くことにその博識な知性は中江藤樹の思想をも射程に入れ評価しています。しかも、シユタイナーと西先生がともにもつこの神智学的な見方は、排他的闘争的ナシヨナリズムと別の、多様性と共生を同時に満たす〈特殊ー普遍図式〉を保有した理論とすることができます。具体的には、この理論は、〈普遍〉の側から一方的に〈特殊〉を導く図式でも、人間認識の制約性を根拠に認識射程に限界をもうけ、認識と存在を、特殊内の一般的な次元と特殊外の普遍的次元とに分断する見方でもなく、状況相対主義に徹し可視的な事象のアベレージやマジョリティに有用性を特化する「静止した輪切りの判断」もまた支持しません。かれらが示す、内在ー超越理論は、〈状況相対的で多様な現実〉や、自我理解に際する互いの〈不完全さ〉や〈変容可能性〉を容認した上で、特殊が特殊なまま共存しつつ各々が具体的普遍を実現していく〈特殊即普遍のパラダイム〉を採用します。ここには、危惧される排他的闘争的要素は見いだせず、逆に、異質なものが異質なままに共生できる「今日的な寛容・和解理論」の可能性を示すこととなります。

そして、この西倫理学の研究を終えた時点で、つづいて空外先生の思想研究に取り組んでいくことがわたしには自然な流れとして決意されました。

空外先生の宗教的・学的体験を求めて

空外先生とご縁のあった仙厓の研究については、廣大赴任後、NHK「新日曜美術館」での解説（平成十九年）、仙厓書画のコレクションをもつ福岡市美術館（平成二十年）や出光美術館（平成二十五年）での講演などで、空外先生の仙厓評も含めて成果を伝えることができました。しかし、実際に、空外先生の哲学そのものにふれていったのは、いまから二年前の平成二十四年の春以降のことでした。

わたしは人物研究をする際、最初に、その人の生涯を可能なかぎり追思考・追体験することにしていきます。空外思想を研究する場合も、はじめに先生の内的葛藤とその克服の具体的なすべを感じとりたいと思いました。そこで、まず、空外先生が、生涯、精神のよりどころとした弁栄上人とその光明主義（浄土宗系）について、河波昌先生（光明修養会上首、東洋大学名誉教授）の論文を読んだり、福岡にある光明派の大願寺の金田隆栄住職に光明主義の教えを請うために訪ねたりしました。つぎに、わたしは、空外先生の学績をたどるべく再び隆法寺に空外記念館を訪ねました。坪倉空幹住職のはからいで閉館時期（二月）にもかかわらず調査のために半日記念館を開放していただきました。わたしはそこで空外先生の膨大な蔵書を一冊一冊手にとって拝見することができました。ドイツ留学にかかわって集めたと思われる新カント派



空外記念館蔵書

や現象学関係の書籍、さらに空外思想の核心をなすプロティノスの図書、それにプラトン、アリストテレスの原典や解釈書、そしてそれらへの丁寧な書き込みやアンダーラインから、学究者である空外先生の姿を彷彿することができました。

加えて、空外先生の学的宗教的足跡を知るうえでこの上なくありがたいご支援がありました。そのひとは、わたした

ち倫理学研究室の大先輩であり、本記念誌の編者でもありません。荒木光哉先生です。送って

いただきました先生の論文『山本幹夫（空外）先生、被爆後出家、

思索と布教の生涯に学ぶ』（尚志会No.18『二十一世紀の教育の

創造 教育の原点）を通して、

空外先生の詳細な生涯（西先生による空外先生宛の書簡も掲載）を知ることができました。

さらには、空外先生にゆかりのある神戸通照院の龍飛水上人と京都西方寺の川本剛空上人をあげることができます。両上人は、わたしが空外先生や西先生の哲

学を学ぼうとしていることを人づてにお聞きになり、両先生の関係図書や文字起こされた講演録を、随時、わたしの研究室に送ってくださいています。お三方の深く温かい思いを、後の世代に引き継いでいくことができましたと思っております。

空外先生と出西窯（無自性館）

さらに、福岡県の高校教諭時代にお世話になった、県教育界の重鎮で倫理学研究室の大先輩である山廣恵先生からは空外先生と関係をもつ鳥根県の出西窯の資料をお送りいただきました。早速、この二月に出西窯を訪問し、現代表の多々納真氏（初代弘光氏のご子息）から空外先生の事跡を伺うことができました。

出西窯は、鳥根県出雲市斐川町にあり、真氏の父、多々納弘光氏をはじめとする五人の若者が、戦後に自らの生き方を求めて、宗教哲学者の柳宗悦、陶芸家の河井寛次郎、版画家・陶芸家の英人バーナード・リーチらの薫陶を受けて郷里に創設した焼きものづくりの



出西窯創業メンバー：左から二人目が多々納弘光氏：『郷土の陶芸② 出西窯』平田市立旧本陣記念館刊から転載

工芸共同体です。四人の若者は戦後の無常観から、生きるための精神的支柱を求めていました。そこで、弘光氏の両親の仏縁もあり、昭和二十五年に、隣の加茂町にある菩提寺・隆法寺へ空外先生を訪ねたのが機縁となったとのこと。それから、幾度となく、片道約七キロの道を自転車で早朝五時の勤行に間に合うように一時間かけて皆で通われたそうです。毎回、本堂での念仏行のあと、一時間ほど空外先生の講話を聞かれたといえます。そこでのお話しを通じ、「何とかしたい」という各自の焦りがとらわれの心をもたらししていた



(左) 講話をする空外先生、(右) 無自性碑と多々納真氏

ことを知り、「他力作善」の意義を学び、その精神を自らの民芸運動と重ねていくことができたといわれます。多々納氏はそのことを、「山本空外上人によって水を張られ、柳宗悦先生によって苗を植えられた」と語っています。草



空外先生筆の無自性解説

創期以降も毎夏、空外先生を出西窯にお招きし、関係者の家族全員でご講話を拝聴したとされます。

出西窯と空外先生の思想との関係を考えるとき、その最も象徴的な精神は、出西窯四十周年の際に建立された、空外先生ご揮毫の記念碑「無自性」に表さ

れているように思えます。冒頭にあげた、真氏の言葉「すべてへおかげさま」は、その無自性のこころがいまもこの地に息づいていることの証左といえます。

この出西窯の展示館は、この精神を反映し、「無自性館」と名づけられています。そこには民芸の精神に基づいた日常生活に用いる陶器がならべられています。まさに、その美しさは「機能美」といえます。また、無料の喫茶室では棚に並べられた様々な味わいのあるカップから好きのものを選び、コーヒーやお茶を楽しむことができます。山里の風景をめでつつ心のこもった陶器でいただく一服は、豊かなひとときを提供してくれます。

もうひとつ、出西窯と空外先生とが今日においてつながる話題をお伝えしましょう。この出西窯では、朝八時半の朝礼

で河合先生の作られた「仕事のうた」が詠唱され、夕方五時半の終礼では、他力の心を忘れないために、「同唱十念」として、空外先生が生涯称えつづけた「南無阿弥陀仏」が十回いままなお唱えられています。加えて、この念仏とともに、先代から脈々とつながる空外先生の精神が、もうひとつ、録音テープという形で作陶場の二階に残されていたことが今回の訪問で分かりました。現在、病床に伏す先代の弘光さんはそのことを気にかけているといいます。哲学者、宗教家、そして芸術家である空外先生が若き陶工家たちに何を伝え語りかけようとしたのか、ぜひ、弘光さんの思いを形にしたいと思っています。

空外思想との出会い

最後に、学び始めた空外先生のご思想について少しだけ感想を述べてみたいと思います。わたしにとって、空外思想についての最大の関心は、その宗教体験と構築した哲学体系との



登り窯に祈りを捧げる：出西窯HPより転載

関連、ならびに、排他的闘争的ナショナリズムとの理論上の分岐点についてです。空外先生の哲学上の主要著作『哲学体系構成の二途—プロテイノス解釈試論』を読み終え、その深遠な哲学のうちには、自らの宗教的確信に根ざす、特殊と普遍の呼応、ならびに具体的普遍に向けた生成の図式があざやかに反映されているように思えます。具体的には、空外先生はそうした自己の描く「特殊即普遍の内在—超越関係」を、アリストテレスの内在的一元論（降りの途）とプラトンの超越的二元論（昇りの途）を包摂するプロテイノス哲学（神智学）のうちに構造化していくこととなります（カント以降の哲学では新カント派のバウフ「バーデン・西南ドイツ学派」やナトルプ「マールブルク学派」等の内にそうした双極弁証法ともいえる総合的止揚の関係を見いだします）。こうしたパラダイムをみると、空外先生は、まさに、垂直軸の体験に根ざす西先生やシュタイナーと同じ思想基盤をもたれていることが分かります。しかも、空外先生が、プロテイノス哲学の淵源を、ブレイエやミュラーの説くインドやギリシアに固定せず、「哲学としてはギリシアのものを根拠とするが、ユダヤ、エジプト、ペルシア等の文化の交叉」にみるべきとしていることは、神智学のご思想系譜を視野に入れた洞察であると深く共感いたしました。神智学は、空外先生も言及されているように、アレクサンドリアのアンモニオス・サッカスに

おいて確立され、その思想は弟子プロティノスによる体系化を経て、イスラム哲学（アルファラビ等によるスーフイズム）やスコラ哲学のトマス・アキナスの思想（イスラム哲学者アヴィチエンナの影響）にも基本的な概念が引き継がれていきます。そして、その淵源は、現在の神智学研究が指摘するように、カルデア（新バビロニア）地方に端を発するミトラ教やマズダ教にあり、それらがゾロアスター教（ペルシア）を経由して、ユダヤ教（カバラへ）、キリスト教（薔薇十字へ）、初期仏教（ベータや華嚴へ）、道教（仙道へ）、イスラム教（スーフイズムへ）とプロティノス思想がリンクすることで多様な変化を受け、フリーメーソン、グノーシス、チベット密教等とあわせて神智学の壮大な系譜を形成することになります。

以上のように、空外先生の研究についてはまだ緒に就いたばかりですが、精緻な先行研究や原典研究をもとに構成された先生の重厚な研究は、わたしにとって、それまでのシユタイナーや西倫理学等の研究がなければ難解さゆえ、思想の核心部分に接近することは困難であったものと思われまふ。ここまで明らかにされた空外思想は、戦後、実際に空外先生が

受けたように、国家主義的イデオロギーの宣揚を理由に追放されたり、封印されたりするようなものではなく、西理論同様、「同質化」「異質な者の排除」「全体化」とは相容れない、「特殊が特殊なまま多様性を保ちつつ変容し、普遍と即応する程度に依じて各々の具体的な普遍を実現する」というプロティノスのな（特殊即普通のパラダイム）を理論の基底にもつといえます。わたしたちは、特殊性を考慮しない一方的な偏った正義の強要が原理主義者を刺激し、テロリズムのような無限のない負の連鎖をもたらしている現実を見いだします。平和を考えるうえで重要なトポスであるこの広島の地から、「他を包み生かす」空外思想の今日的な有効性を発信する時期に来ていられるのかもしれませんが。

思想はそれが本物であるほど、灯されたその炎は人から人へと運び受け継がれていくように思います。（無自性）としての縁に支えられ、微力ではありますが、今後、空外先生の思想に光を当てることができれば幸いに思います。

（広島大学准教授）